

木の目草の芽

2017年1月25日
公益社団法人
日本山岳会
自然保護委員会
TEL:03-3261-443

年間購読料 1,000 円
申込 : 047-463-8721
syuaki@pony.ocn.ne.jp
郵便番号 00180-4-710688
加入者名 : 川口章子

あけましておめでとうございます

自然保護委員長 川口 章子

私には年頭に浮かぶ和歌があります。

新しき 年の始めの 初春の

今日降る雪の いやしけ 吉事

ご存じの方も多いと思いますが万葉集の最後の一首で、大伴宿禰家持の歌ですが『いやしけ 吉事』を、迎えた一年の日々の願いと、生き方に心をめぐらし新しい年を始める言靈にしています。

吉事を導くには行動を伴います。

今、日本の各地の山や自然を取り巻く状況のなかで、一人ひとりの登山者が、それぞの山を自然を次の世代にどのような状態で残し、保全するには今何をしなければならないかを考え、発信し行動していくかなければならない大事な時だと確信しあいま

した。山の日が制定された今こそ取り組まなければならぬ課題だと。

確認し合った問題から前に進むために、今年は動き始める年にしたいと思っていました。反対運動ではなく、関係の部署に要望や、私たちに出来る事を伝え共同で前に進む努力を始めましょう。

すでに始めている支部もあると想います

が、1月19日埼玉支部・自然保護委員会のシンポジウムでは、シカ問題を『各関係

部署に働きかける』事が報告されました。山岳団体自然環境連絡会も環境省と共に催でシカ問題のセミナーを開催します。

皆様のご協力を願っています。

さて、今年の全国集会は昨年度の反省を

- 生かし支部報告、グループディスカッショングの報告時間等の問題を踏まえて、宿泊と会場を同じ場所で出来るようになると岐阜支部に無理を承知でお願いをしました。
- 開催予定の7月は、岐阜は鶴飼いの季節、宿は稼ぎ時、希望の予算額で会場を確保するため、委員長の高木氏、自然保護委員長の藤田氏方が交渉を重ねてくださり会場の予約をすることができました。7月の予定に入れてくださいるようお願いします。
- P.1 委員長新年挨拶 川口 章子
- P.2 会長特別表彰を受けて 柴崎 徹
- P.4 自然観察会報告 ~横浜(寺家)ふるさと村~ 櫛田 効
- P.6 「山の日」制定記念行事報告 ~草津町で上映会を開催~ 下野 武志
- P.7 ウサギ減少の原因は? 元川 里美
- P.8 寄稿: 大鹿村を破壊する リニア中央新幹線(2) 佐藤 明穂

テーマ 『外来種に怯える山の植物達』

会場 岐阜・長良川温泉『十八楼』(岐阜市
湊町10番)

日時 2017年7月9日(日)～10日(月)

開催時間 検討中

例年と開催曜日が変わっていますのでご注意ください。

（会長特別賞を受賞された柴崎徹様に、受賞のことばを寄せていただきました。）

会長特別表彰を受けて

—「東日本大震災後の山岳放射線調査」のこと—

宮城支部自然保護委員長 柴崎 徹



この五年にわたり、原発事故による山岳の放射線量の調査にひたすら携わってきたが、そのことに対する、この度、小林政志日本山岳会長より特別表彰を受けることになった。その経緯については、私の知るところではないが、おそらく日本山岳会の多くの方々、特に自然保護委員会、山岳編集委員会の方々がそれなりの評価を下され、ご推薦いただいたのではないかと思つてゐる。それにしても、放射能汚染という誰しもが避けて通りたい極めて厄介な負の問題に対して、何の臆することもなく取り上げていただいた日本山岳会の方々には、深い感謝の念を禁じ得ない。

原発事故によつて山々が被つた放射能の実体を具体的に調査し、正確な記録として残し伝えることは、登山者の誰かがなさねばならぬことだと考えていた。山地における

る調査には、登山的思考と行動が欠かせない条件になる。一年半ほどかかつて自宅の再建ができたとき、ただちにとりかかつたのは、宮城県の線量調査であった。この調査には二年ほどかかつたが、その概要を、

2014年、広島で行われた自然保護全国

集会で報告させていただいた。報告を終え

た時、私には広島の原爆投下と福島の原発事故とがつながつた一瞬のように思えた。

宮城の調査からは、福島側から押し寄せた強い放射能の影響が示唆されていた。放射能の分布を正確に捉えるためには、原発との間に広がる阿武隈山地の調査が欠かせないことは明白であった。阿武隈山地につ

いては、私たちも積み上げてきた実績があつた。それらの経験を踏まえて、山地の地勢を系統的に捉え、重要な位置の山々を丹念に辿りながら同時に短期間で完了させるような調査を心掛けた。その後、約8ヶ月に亘る日々を阿武隈山地とともに過ごすことになつた。仕事のある日と雨天の日は避けたが、あとはすべて調査登山に専念する毎日で、パーティを組めない時は単独での調査もいとわなかつた。こうして、阿武隈山地の山々を宮城・福島・茨城と調査し、

らに『山岳』の2つの報告については、それぞれ200部づつ「別刷」を依頼しつくつていただいた。この「別刷」は、通常、『山岳』に触ることのない日本山岳会以外の山岳団体や個人登山者、放射能汚染とかかわりのある地方自治体、大学及び研究機関の研究者など広範囲の方々に配布させていただいた。また、その反響もたくさんいただいた。

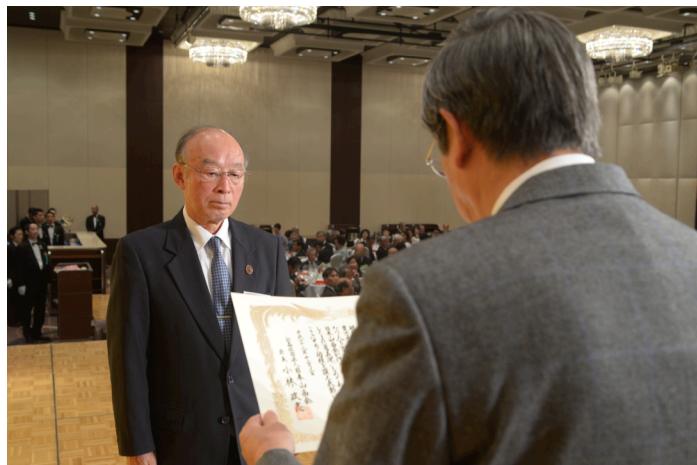
思えば、これだけ大きく深刻な、しかも特異な事故にかかわらず、自然や山岳における具体的な放射線量を示した調査は意外なほど少ない。『山岳』に載せていただいた調査記録が一人でも多くの方たちの目に触れ、放射能汚染の実体の理解に供するとともに、登山を含めて対応への手懸かりにしていただければと思つてゐる。こ度は本当に有難度うございました。

南端の山々まで辿り着いたのは昨年の4月30日であった。

これらの調査をまとめた報告は、前年の

『山岳』(第百十年)に載せていただいた「原発事故による宮城県の山地及び丘陵地における放射線量」に引き続き、「原発事故による阿武隈山地の放射線量」と題して『山岳』(第百十一年)に掲載していただきた。さ

部副支部長(1989年～1995年)、同支部長(1995年～2000年)、同支部自然保護委員長(2000～)。



写真提供：総務委員会

柴崎 徹
1941年、仙台市生まれ。農学博士。宮城県環境保全課、伊豆沼・内沼環境保全財団、東北工業大学勤務を経て、現在、仙台青葉短期大学、仙台工科専門学校講師、財團名譽研究員。この間、日本山岳会宮城支

《自然保護委員会自然観察会報告》

～横浜（寺家）ふるさと村～

講師 櫛田 効

実施日時 2016年10月22日 曇り

10時～13時40分

四季の家で昼食後 15時解散

観察場所 横浜市青葉区寺家町

通称 横浜（寺家）ふるさと村

山田谷戸及びふるさとの森

■ふるさと村の概要と当日の記録

横浜寺家ふるさと村は横浜市の最北部に位置し村の北と西は東京都・町田市に、東は川崎市麻生区に隣接した86.1ha、海拔250～70mの里山です。この里山風景は日本各地の田舎では、おなじみの風景ですが、東京・横浜のような大都会の近くではなかなか見ることのできない貴重な場所となっています。

この地域では都市化の波は1960年代

の終り頃から急速に進み1980年代の終り頃には里山の自然は殆ど見ることができなくなってしまいましたが、この場所には残りました。理由は横浜市が1981年に

策定した21世紀プラン「田園風景の保全」と寺家町の住民が先祖伝來の農地と村を守り継ごうと決意したことがうまく合致したことによります。その後、寺家町は1983年に横浜市ふるさと村の第1号の指定を受け、都市開発の規制に守られながら田園景観の保全・農業の第3次産業化・周辺の新しい住民や子供の農業や農業文化の体験を進め里山の自然の保持を続けています。

自然観察の当日は最初に山田谷戸の出口付近（鶴見川に近い位置）で田園風景の全体を確認しました。土地利用の配置が300年間ほとんど変わっていないのに驚きました。ふるさと村は幸いにして、元禄15年（1702年）の絵図が残り300年前の丘陵・川の地形と池・田・畑の土地利用の状況を比較することができ、明治19年（1886年）の陸軍省参謀本部作成の迅速図でやや高台に位置している住居の配置も比較ができますが、殆ど変わっていないのがわかります。

ができたのですが。

ふるさと村の谷戸の奥には300年前から5つの溜池が造られていて谷戸の水田に安定した水を供給しており、今でもそのまま有效地に利用されています。大池の谷戸の奥ではキバナノアキギリが名前の通り黄色の花を咲かせ、別の谷戸の奥ではツリフネソウが紅紫の花を咲かせていました。春ですとこのような谷戸の奥の湿地ではイチリンソウやニリンソウの白い花が楽しめたのですが。

次に山田谷戸の農道を歩きます。この時期（秋の後半）はヒガンバナも終りに近づき、野の花の少ない時期ですが農道より下の土手や畔ではキク科のノコンギク・カン

トウヨメナ・ユウガギク・リュウノウギクの花々、タデ科のサクラタデ・イヌタデ・ボントクタデ・ミヅソバの花が咲いていました。この谷戸では田植前の乾田では春の七草やレンゲソウ（ゲンゲ）の花を楽しむことができ、田植後の5月下旬から6月上旬にはゲンジボタルの乱舞を楽しむことができます。

歩きます。この里山は昔ながらのコナラ・クヌギ・ヤマザクラの多い薪炭林の風景を残し、至るところに株立更新の跡を見ることができます。

春先の樹木の葉の繁る前の3月～5月上旬にはシュンラン・キンラン・ギンラン・チゴユリ・タツナミソウなどが咲きますがアズマネザサの刈り取りが充分でないと姿を消しますので気になるところです。



<寺家ふるさと村「四季の家」ガイドマップより>

底に堆積した粘土層が多い部分は昔々海が目の前に現われている場所と言えます。このように地形・植生・農業活動によって素晴らしい田園風景が出来上がっていますが、最近はこの風景にも綻びが目立つようになつて来ました。観察会の途中でも方々に見られましたが、労働力の

この里山の尾根道を歩くと粘土の多い場所とそうでない場所とがあるのに気が付きます。

この地域の里山は約100万年前に浅海に堆積した地層が隆起して地上に現われたもので多摩丘陵一面の南東縁に位置し上総層群王禅寺層と呼ばれています。この地域の里山は70～80mの高さですが長い間の浸食で凹んだ部分は谷戸になりその谷戸の下流は鶴見川とその沖積地につながっています。尾根道の粘土

の多い部分は昔々海底に堆積した粘土層

自然に触れる機会の少ない大都会に貴重な場所を30年に亘つて提供して来た横浜

(寺家)ふるさと村は今後どのようにして田園風景を維持して行くか大きな正念場を迎えているように思われます。

(日本山岳会 山の自然学研究会員)

※講師をつとめてくださった櫛田さんはこれまでに2000回以上も横浜(寺家)ふるさと村に足を運び観察を続けてきました。そんな櫛田さんによる見どころを、当日の報告とあわせて紹介していただきました。

不足のため放棄田が年々増えて来ました。田は2～3年放棄されると背の低い雑草だけなく、アシやセイタカアワダチソウなど大型の雑草が増え著しく田園風景を損っています。農業後継者の減少は著しく、NPOの方々などの農業体験の機会作りの努力や近隣の幼稚園・小学・中学の生徒による農業実習体験もカバーできない状況にあります。特に隣接する町田市の行政区域の谷戸の荒廃が進み、本来一体であつた田園風景が大きく損われているのを痛感します。

《「山の日」制定祝賀記念行事報告》

「タスマニア物語」の上映会

を実施しました

日時 .. 2016年8月10日(水)

午後3時～5時、6時～8時

場所 .. 群馬県草津町公民館

主催 .. 草津の自然を愛する会、

日本山岳会自然保護委員会

後援 .. 群馬県草津町教育委員会

一般財団法人全国山の日協議会

この映画は、1990年公開の日本映画でフジテレビ制作、東邦配給で25億円をかけ、観客動員数は350万人を上回り、その8割がファミリー層だった。27年前の封切りに見た感動は今でも鮮烈に記憶している。タスマニアの美しく広大な自然が無残な姿に変わって行く姿にこのドラマの主人公ならずとも心痛むが、現在の日本が直面している問題はもっと深刻である。スタッフ配役名は省略するが、特に小学生の正一役の多賀基史君の好演は特筆に値し、このドラマの価値を高めている。今回の映画会に参加した町民は小学生から94歳の女性まで107名で公民館は満席だった。

小学2年生の男の子に感想を聞いてみると



<草津町公民館にて>

「正一君のように勇氣があつて強い男の子になりたい」とのこと。一方94才の女性は「とても楽しい映画でしたよ。また生きる勇気が湧いてきました。是非またやつて下さい」と逆に激励された。

■この映画のあらすじ

オーストラリアの雄大なタスマニア島を舞台に、その美しい自然に生きる父と子の心の対話を描く。小学6年生の正一は小学校最後の春休みを利用して父の住むオーストラリアに向う。だが、一流商社に勤めていたはずの父榮二は、会社を辞めて南の島タスマニアに住んでいるというのだ。シド



<映画のワンシーン>

共にタスマニアタイガーを探しに出る。
一晩中ねばる正一と

榮二。夜が明け、森林をさまよつた正一は、そこで朝日を背にして吠えるタスマニアタイガーを見る

二の町を見物していた時、正一は実（みのる）という少年に出会う。複雑な家庭事情があり、家出してきたばかりという実に正一は親しみを感じる。そんな時、平島直子と名乗る女が二人の前に現われ、正一と実を栄二のもとへ案内するのだった。しかしそこで正一と再会した栄二は、タスマニアの自然保護運動に参加して、幻の動物タスマニアタイガ（虎ではなくオオカミの一種）を追っていた。そんないるのかいないのかもわからないタスマニアタイガーを追うことでの頭が一杯になつて、少しばみ出した行動をする栄二に疑問を抱き、反発してしまう正一だったが、いつしかそんな栄二の姿に頼もしさを感じるようになる。遂に春休みも終りに近づいた頃、正一は栄二と一緒にタスマニアタイ

■お知らせ

この映画の再上映会を実施します。

日時・2月11日（土）午後1時～4時

場所・町田市成瀬中央集会所

この映画上映会は成瀬自治会主催で、

公益社団法人日本山岳会二火会後援です。

多くの方々の参加をお待ちします。

※世話係 佐藤登代子

TEL・0427272682

（報告：自然保護委員 下野武志）



＜タスマニア クレイドル山

セントクレア湖国立公園＞

ウサギ減少の原因は？

12月24日、日帰りで上高地に入り、明神池まで雪上散策をした。まだ積雪はさほど多くないので足元は長めの長靴。前日まで天候が少々荒れ模様だったせいか、歩いているグループはほとんどいなかつたので、雪上には動物たちの新しい足跡がはつきりと残されていた。きっと未明に、もしくはつい今しがたまで活動していた動物たちの痕跡に違いない。

アニマルトラッキングに精通しているわけではないけれど、当日確認できた（と思われる）動物は

- ・ リス・・・ハルニレやカラマツの木と木の間を渡り歩いている足跡を時々発見。この足跡には自信あり。
- ・ キツネ・・・まっすぐブレずに進む足跡。最も頻繁に見かけた足跡。多分、キツネと思われるけれど、タヌキやテンと混同している可能性もあり。
- ・ モグラ・・・2箇所で発見。いわゆる“足跡”というよりは、棒の先で雪面に一筋の線を引いたという感じ。ただそれが「ヒミズ」なのか「アズマモグラ」なのか、その辺は不明。

期待していたネズミの可愛らしい足跡は

残念ながら見つけられなかつた。そして今回驚いたのは、ウサギの痕跡が全く見つけられなかつたことだつた。足跡はおろか、一粒のフンすらも落ちていなかつた。30ほど前の上高地では、野うさぎは茂みの中でごく普通に見られたらしいが、今は夏もほとんど見かけることはない。これまでからうじて積雪期に足跡とフンを見つけては存在確認をしてきたが、今回はそれも全く見られなかつたのだ。

ウサギ減少の原因は一体なんだろう。捕食者のキツネが増えたという話を聞いたことがあるが、それほどキツネは増えているだろうか。また生息環境の変化とも言われているようだが、全国の里山でもウサギ減少の報告がされていることを踏まえると、そこに共通する「環境変化」とは？

（自然保護委員 元川里美）

■購読料をありがとうございました

（2016年度）

関塚 貞享（横浜市） 石岡 慎介（市川市）
田村 佐喜子（松本市） 里見 清子（甲府市）

敬称略 合計4千円

大鹿村を破壊する

JR東海・リニア中央新幹線(2)

長野県下伊那郡大鹿村

佐藤 明穂

〔前号から〕

4. 地方自治体の対応（大鹿村、長野県）

「住民を守ってくれるのは一体誰なのか」

(1) 大鹿村議会議長の失態

JR東海による説明会と相前後して、昨年（2016年）10月3日に大鹿村議会議長・熊谷英俊名でJR東海に対して意見書を提出している。内容は事前に取り交わすべき項目、協定の必要性など8項目を列挙している。ただ、とりわけ問題なのは

前文に書かれた甚だしい事実誤認である。

① 住民から出されたリニア事業に反対する陳情書を議会で採決、4対3で否決した。「賛成少

数で不採択と決した」とあるが、本当にこの

(2) 大鹿村長の大失態

住民自治の要は議会であり、首長である。立場

は異なつても、双方とも住民生活に資する役割を持つ。もし議会がその任に不足することがあれば代わって首長がその役目を果たすのが本来のあり方である。だが、残念ながら大鹿村ではその村長も主体的な役割を全く果たさず、JR東海の言いなりになつてている。

「リニア事業に反対するのではなく、前向きにとらえ受け入れていく中で、リニア事業を村のメリットにつなげる、ということを大鹿村民の民意とすべきであるという意思を、我々村議会は示した」とあるが、住民と議会の間でこのような話し合いは一切持たれておらず、議会とくに議長の独断で、このような意思表明をしてよいのか。

最も大きな問題は、柳島貞康村長がリニア中央新幹線のような村全体に大きな影響を及ぼす事業

③ 「今後、双方が良好な関係を築く中で、リニア事業が成功し、同時にそれが本村の発展につながるよう」とあるが、住民説明会などを通じて「大鹿村にはメリットはない」と言明して、JR東海が、村に対して本当にそのような関係を築く対応をしてきたのか。この意見書に対する回答が17日にJR東海から村に提出され、18日に村議会の全員協議会（決議保留）、19日に村とJR東海が確認書を取り交わし、さらに21日の再度の全員協議会が持たれて4対3の議決で同意、これを受けて柳島貞康村長が「同意表明」している。この時計で計られたかのようなスケジュールは一体何を示すのか。後日、当の熊谷議長が「もつと議会で審議する時間が欲しかった」（朝日新聞）と話しているが、これは住民のために議論したのではなく、あくまでもJR東海の意向に沿つて動いたことを明らかに物語っている。

また、住民自治の観点からも村長の判断・行動は問題だ。10月14日の説明会後にJR東海が住民理解は進んだと一方的に決めつけた後、21日に村がそれを追認したこと、次いで10月19日にJR東海と村が確認書を取り交わした後で住民に合意内容を公表したことなど、住民自治そのものを当の行政が否定する行為にほかならない。ましてや、取り交わした確認書の内容を19日から2日間だけ村のホームページ上で公開して村としての同意表明をするなど、言語道断である。確認書の存在すら知らない住民もいる中で、この柳島村長は住民でなく一体誰の方を向いて仕事をしているのか。たとえJR東海から無理難題を言われたとしても、その時は民意に訴えるという発想が村長にはひと

つもなかつたのか。

このように住民の生活を守るよりもJR東海や関連団体の利益を優先する人物が、こともあるうに3期目を目指して村長選挙に立候補表明（11月11日）している。政策の継続性を公約にするようだが、「住民疎外」の政策は住民にとって百害をもたらすだけである。そして大鹿村の将来、グランデデザインが描けないような首長はいるない。選挙は2017年1月である【注】。

（3）傍観者・長野県と知事

JR東海による起工式が目前に迫るなか、当初予定されていなかつた長野県知事らと大鹿村住民との意見交換会（出席者は職掌による代表者、議会議員、執行者等の関係者のみ。住民は傍聴のみ可）が10月30日に急遽行われた。この際、私が阿部知事に直接手渡した文書を以下に付す（要旨）。

長野県知事 阿部守一様

抗議書

平成28年10月30日

このたび10月21日に大鹿村村長が東海旅客鉄道株式会社（以下、JR東海）に表明した「村としての同意」に関連して、大鹿村ならびに中央新幹線建設に關わるJR東海に対して、本来監督しなければならない立場にある長野県、および知事である阿部守一氏の対応について、県民のひとりとして断固、抗議の意思を表明します。

阿部知事がJR東海に対して、地元住民の建設工事への不安を解消し、環境保全に万全を期すことを本当に要望するのであれば、形式的なものではなく、今一度問題点を精査し、監督官庁として指導を徹底するなど有言実行してもらいたい、と切に願います。

このことに関する最大の問題は、長野県知事た

どありませんでした。以後、これらの問題点の改善について進展がないことは、JR東海はもとより長野県が何の対応も全く取つてこなかつたと言われても仕方ありません。

今回、大鹿村がJR東海と交わした確認書については努力義務の列挙が主体で、相手側が遵守できなかつた場合、あるいは履行しなかつた場合の罰則など、ペナルティーが明記されていません。県

はこの確認書の不備に対し、指導するなど具体的な対応は取らなかつたのでしょうか。問題が生じた際の監督責任は一体誰が取るのでしようか。そして最も重要なことは、本当にこの確認書で住民の生活を守ることができるのでしようか。

JR東海は巨大企業であり、小さな自治体が自らの権益を守るうと対等に交渉するのは極めて難しい。それこそ都道府県規模の自治体が積極的に仲介の労を取つてこそ、住民の生命や財産などが守られるのだ。これから同様な交渉がJR東海と関係自治体間で持たれる中で、県の担う役割はこれまで以上に重い。少なくとも今回大鹿村で起こしたような失態だけは二度とあつてはならない。実際、10月30日の意見交換会の際に阿部知事をはじめ随行した部局長などの県職員も、今大鹿村で何が大きな問題となっているのかがあまり理解できていらない様子だった。またこれとは別だが、残土に関する条例がないのは全国でも長野県だけである。阿部知事は環境保護・保全・住民生活の安全を担保するなどの観点から、早期に実効性のある残土条例を制定する義務がある。

なお、この件に関して「県民ホットライン」を通じて長野県の対応を問うた。質問項目および回答（長野県建設部リニア整備推進局長 水間武樹氏）は下記の通りである（要旨）。

① 全国でも長野県には残土条例がない。JR東海

の最大の問題であるトンネルの掘削にともなう発生土（残土）に関して、住民生活の安全を確保する点から早急に実効性のある条例の制定が必要ではないか。

〈回答〉発生土の処理については、それぞれの地域

の事情等を考慮して対策を講ずる必要がある。具体的な安全対策や環境保全措置については、事業者であるJR東海と地元との間で十分に協議、検討等を行い、対策等の確実な実施を文書等で確認していくことが適当で実効性も高いと考えている。このため、条例による画一的な規制を行うことは考えていらない。

(2) 発生土の中に含まれる自然由来の重金属の完全な処理方法、トンネル掘削時に薬液注入しながら発生した土砂は産業廃棄物になるため、JR東海が現在提示している環境対策は全く適合しないのではないか。

〈回答〉環境影響評価制度に基づく環境対策については、2013（平成25）年9月の「準備書」の公表以降、所定の手続きを経て環境影響評価書が策定されている。この間、国や県の専門的な機関で外部の専門家による慎重な審査等も行われており、環境対策の内容は適正なものと認識している。発生土に含まれる重金属について、JR東海は「建設工事で発生する自然由来重金属等含有土対応ハンドブック」（2015年、土木研究所編）の基準等を踏まえて適正に処理すると説明している。また、トンネル工事により発生する建設汚泥については脱水処理で60%が再利用される計画となつており、残る廃棄物もJR東海が廃棄物処理法に基づ

(3)

いて適正に処理するとしている。

小規模自治体とJR東海のような巨大企業との交渉の仲介、事業者たるJR東海に対する監督責任などへの対応は、

〈回答〉2014（平成26）年3月の「準備書」へ

の知事意見に基づく「リニア中央新幹線整備に関する意見」など、これまででも地元の意見・要望に対し丁寧かつ誠実に対応す

るようJR東海に強く求めている。JR東海は、大鹿村では県道の2本のバイパストンネルの新設や教育・福祉施設等を避けた工事用迂回路の設置など、地元の意見・要望に応えた対応策を計画・実施している。特

に住民の関心が高い工事車両運行の安全対策等については、10月19日にJR東海と大鹿村の間で「工事用車両通行等に関する確認書」が締結されている。こうしたJR東海の対応には、県は調整等で一定の役割を果たせたものと考えている。地域の課題への対応には県として、引き続き地域の様々な声に真摯に耳を傾け、課題等の解決に向けた関係市町村と連携しながら、積極的に取り組んでいきたいと考えている。

【注】村長選は今年1月15日に行われて現職が当選した。無投票ではなく、住民の意向が反映される場があつたことは評価される。今後、

村長が住民の広範な意見をどう集約し実行するかが試される。

卒ご理解いただきたい。

おわりに

(1) 南アルプスの自然環境

南アルプスの自然環境については周知の通りであるが、以下に特長の概要を確認する。

◇ 魅力

日本で最も南にある3000m山群である。これだけの広範囲にわたつて自然環境・生態系を有している場所はわが国全体でも他に類を見ない。このことからもひとつ大きな「自然の博物館」として、エコパーク（認定済み）や世界自然遺産の登録に向けた活動が進められている。

◇ 動物の生態

広く森林が残されているため、多くの種類の動物が生息している。哺乳類はニホンカモシカやツキノワグマ、ホンドキツネなど30種類以上が確認されている（他の中部山岳地帯とほぼ同じ）。一方

〈回答〉県条例の制定に関しては、上記①に対する回答のとおりである。また環境保全措置や発生土置き場等についても関係法令で必要

な規制等は規定されているため、こうしたガイドライン策定は考えていない。JR東海に対しては引き続き法令遵守を厳しく求めていくとともに、県が所管する法定手続きでは厳正な審査等を行つていくので、何卒ご理解いただきたい。

で二ホンジカの生息域が拡大したため、ここ10～20年で高山植物などの深刻な食害が発生している。鳥類は他の中部山岳地帯に準ずる（大井川上流域での調査結果では29科87種を確認）が、とくにライチョウ（国指定特別天然記念物）は世界における生息域の南限として貴重な存在である。

◇ 植物の生態

この地域は、アジア大陸を中心には分布する北方系の植物と東南アジアを中心に分布する南方系の植物のそれぞれ南限と北限に当たり、極めて多様な植物相を持つのが特徴である。また我が国でも太平洋側に位置するため、年間の降雨量も多い。

このことは南アルプスおよび周辺域が豊富な水資源に恵まれていること、そしてここを源流とする

河川（大井川や天竜川、富士川など）とも大いに関係があることを示している。高山帯はおおむね標高2600m以上であり、亜高山帯の森林にはシラビソやコメツガなどが多い。高山植物は稜線の風衝地帯や遅くまで雪の残るところに多く、北岳の南斜面や荒川岳前岳付近には多くの群落が見られる。なかでもキタダケソウやキタダケキンポウゲ、タカネマンテマ、サンプクリンドウ、アカイシリンドウなどは当地の固有種である。加えて光岳山頂付近のハイマツ帯はわが国の南限にあたる。

◇ 地質

フィリピン海プレートがこの南部の地下に潜り込んでおり、南アルプスは現在もなお年間4mm程度隆起する間4mm程度隆起する、日本の中でも「若

い山脈」である。周辺部にある糸魚川・静岡構造線や中央構造線といった大断層を含め、四万十帯や三波川・秩父帯などの地質構造によつて形成されている。また全体に無数の断層が入つていて、これらはエコパークで規定された「持続可能な自然の利用」とは全く相容れない。つまり環境教育やエコツーリズム、自然環境との調和といったものとは明らかに反するものだ。エコパーク認定の際の核心部分はトンネルで

の大日影岳から荒川岳（前岳）にかけて各々長野県側の西側の崩壊が顕著である。この周辺では毎年崩落する箇所が拡大しており、全体が深層崩壊する可能性があるものと考えられている。またリニア中央新幹線のルートにあたる悪沢岳（荒川東岳）から大井川西俣周辺域にかけても脆弱な地質である。

(2) 今、求められることとは

南アルプスは標高2500m以上に人工物がないなど、日本アルプスの中でも環境が保全された貴重な山域である。この地域に住む人々は、これから生み出されるさまざまな恵みを享受してきた。このようしたことから、2014年6月には南アルプスを抱く一帯がユネスコのエコパークに認定された。

しかし、この地にリニア中央新幹線を建設することはこの関係を根底から破壊する。JR東海は「工事はエコパークの移行地域で行われるので問題はない」と述べている。だがトンネル掘削による発生土（残土）の杜撰な処理方法や河川の水抜け対策、工事車両による騒音・大気汚染、あるいは住民の住環境保全に対する具体的な対策の欠如

など、JR東海の進める工事がどのようなものかが明らかとなっている。これらはエコパークで規定された「持続可能な自然の利用」とは全く相容れない。つまり環境教育やエコツーリズム、自然環境との調和といったものとは明らかに反するものだ。エコパーク認定の際の核心部分はトンネルで通過するから、自然環境に対する何の具体策も取らなくてもよいのか。この地下トンネルの建設は手つかずの自然が守られているという自然遺産の完全性を失う恐れがあるとの指摘もある（日本自燃保護協会 吉田正人氏）。

別の視点から考えると、このリニア中央新幹線は基本的に東京を中心とした都市の問題である。本来、この問題はその恩恵を享受する人たちの中で解決すべきものである。にもかかわらず、実際はこの処理をそれ以外の地域に押しつけている。今までのこの国の発展の構図がまた繰り返されようとしている。現代は日本の人口が減少に転じ、国が成長そのものが「量から質へ」変わる時である。パリ協定を引き合いに出すまでもないが、世界の潮流は人類が自然環境とより共存することを求めている。リニアはこの流れに明らかに逆行する。リニア車両の技術革新で済まされるような問題ではない。それは貴重な自然環境を破壊してまで作る必要が全くないものだからだ。将来世代に何を残すべきか、眞の自然保護の理念が現世代に求められる。

◇自然保護委員会の活動記録◇

（十一月度）

① 理事会報告 10月31日（月）

- ・名譽会員の推薦を今年度は行わない。

② 山岳団体自然環境連絡会 10月24日

- ・3月11日開催の「シカ問題シンポジューム」の補助金が出ないことになり、計画練り直し。

③ 自然保護委員会報告 11月30日（水）

- ・自然保護委員会主催「寺家ふるさと村自然観察会」10月22日（土）参加者11名。

- ・公開講演会「シカ研究者がみた最近の日本の山」11月25日（金）参加者25名。

審議事項

- ・自然保護全国集会開催について

日時：7月9日（日）～7月10日
(月)

- ・費用の試算の再検討。参加費、実行委員長を1月委員会で決定。
- ・シカ被害を調べる手がかりテキスト作成等について。

- ・シカ問題で私たちに出来ることは。

テーマ：「失われゆく高山植物」（案）岐阜支部と共に。

シカ問題で私たちに出来ることは。

※支部担当者変更

東北エリア：下田氏・大船氏の2名に。

※臨時委員会開催 1月6日（金）

議題：来年度活動計画、予算の検討。

（十一月度）

① 理事会報告

11月は報告済み

② 山岳団体自然環境連絡会 12月26日

日（月）開催予定

12月14日 国立公園内開催・トレイル

- ・ランニング大会のモニタリングの手続き（案）のヒアリングに川口委員長参加。

③ 自然保護委員会報告 12月16日（金）

- ・12月3日 全国支部会議に川口参加。

・全国集会について。

開場：宿泊 岐阜市湊町「八十桟」

- ・予算見積書岐阜支部より届く。

テーマ：『外来種に怯える山の植物達』

新委員：和田薫氏

審議事項

- ・全国集会について

費用の試算の再検討。参加費、実行委員長を1月委員会で決定。

- ・自然観察会開催について。

行（二）自然観察会

- ・2017年度事業計画について

共益事業：（一）全国自然保護委員会との連携と協力（二）山岳団体自然環境連絡会へ参加（三）機関紙や自然観察会を通して会員増加を図る。

委員会年間カレンダー作成、ホームページの活性化について。

（一月臨時委員会）

① 理事会報告

・第七回日本山岳遺産サミット2月25日参加の要請。

② 山岳団体自然環境連絡会 12月26日

（月）

③ 臨時自然保護委員会 1月6日（金）

- ・連絡会主催行事：テーマ『深刻化する二ホンジカの被害』に決定。

④ 自然保護全国集会について

・参加費 一万五千円

・フィールドスタディ交通費、昼食費は自己負担に。

・2017年度事業計画について

・公益目的事業：（一）全国集会（二）会報発行（三）自然観察会

・2017年度予算案について

・講師謝礼、通信費、全国集会開場費、山岳団体自然環境連絡会会費等

28万円案提出。